

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2006年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学 研究科	地理学 専攻
指導教員	所属・職名		氏 名		
	観光学部・教授		豊田由貴夫 印		
自然・人文の別	自然	・ (人文)	個人・共同の別	(個人)	・ 共同 名
研究課題名	現代インド社会における不確実性と邪術—U.P.州バナーラス県における事例研究—				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
	文学研究科・地理学専攻 ・ 博士後期課程 3 年		小松原秀信 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
研究期間	2006 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200~300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

大きく変貌を遂げる現代インド社会において、人々の間で邪術・悪霊などのオカルト的想像力がリバイバルしていると言われる。こうした傾向は、都市居住者の場合にも顕著である。彼らによれば、邪術や悪霊をおとすには都市にある寺院ではなく、日頃から邪術・悪霊おとしに携わっている村落部の呪医による治療が効果的であるのだという。

本研究では、村落部における呪医の治癒儀礼と都市居住者による邪術・悪霊おとしのための訪村行為に注目することによって、都市居住者の場所感覚(=主観的空間編成)と彼らのオカルト的想像力・儀礼実践との関係、さらにその背景にある現代インドの社会変容を考慮し、文化人類学的視座から明らかにすることを目的としている。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[オカルト的想像力] [主観的空間編成] [現代インド社会]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

今日のインド社会が直面する社会変容は、目に見ることのできる表面的な変化以上に、個々人を取り巻く社会・文化的環境、そして生活空間の質に関わる著しい変化をも引き起こしている。たとえば、都市部では外資系企業の参入が相次ぎ、ミドル・クラスが急速に成長してきている。しかし、そのようなミドル・クラスの生活と低所得者層の生活とは極端なコントラストを描いており、大規模な整備計画によって均質空間化された都市の縁辺ではスラムが急速に拡大し、路上生活者も増大している[関根 2004]。同時代的に進行する画一化のイデオロギーの進展は、皮肉にも、「勝ち組」と「負け組」のコントラストを一層明確に露呈してしまうこととなっている。

この変化は都市部だけに限ったものではなく、その周囲の村落社会を巻き込んだ巨大な渦となっている。もともと村落社会と都市部とは隔絶して存在していたのではなく、むしろ密接なつながりをもってしたが、そのつながりの拡大は 1990 年代に入ってからより強力なものとなっている。すでに経済自由化以前から村落生活者は伝統的職業のみでは生活できなくなってきたが、経済自由化以降はこの傾向に一層拍車がかかり、生活の糧を求めて都市部に出稼ぎにでたり、移り住んだりするといったことが日常化している。しかし、総じて経済状況が悪化する中で、村落から都市に出て富を築こうとする人々の多くが、現実には都市で稼ぎを得ることは困難であり、そのまま都市の縁辺のスラムの中で生活するか、再び村落へ戻って、肩身の狭い思いをしながら生きていくこととなる。

こうしたインド社会の変容は、個々人を結び付けていた紐帯であり、また個人をやわらかく包み込んでいたカーストやジャーティなどの中間集団の解体を引き起こす。社会的相互扶助を伴うジャーティ内の個々人の結びつきは、近代的個人志向性にとって代われつつある。これは、まさにオジェ[2002]が指摘する現代世界を特徴付ける三つの過剰の一つ、「個の過剰」が露わとなるような状況といえる。「個の過剰」が生起する状況下では、個人は他者との柔軟な関係性を持ってない(「他性の危機」)がゆえに、自らの単独性が剥き出しとなるような不安を抱えることとなる。

こうした 1990 年代以降のインド社会の急激な変化に伴って、宗教文化の基盤そのものが大きく変容しているという指摘がなされている[たとえば Babb1995, 三尾 2003]。インド社会において具体的な胎動となって現れている現象としては、大規模化(スペクタクル化)する都市祭礼や都市のヒन्दゥ寺院、次々と誕生する新興(聖者)カルトの存在やインド系移民を通じて世界的展開を見せ始めているヴァストゥー・ヴィディヤ(Vastu Vidiya: 古代インドの建築書とその知識)の再興などが挙げられる[Sekine2006]。これら一連の現象に特徴的なのは、商業主義と密接な結びつきがあるということである。たとえば、*International Herald Tribune* 紙(June 11, 2005)の一面に掲載された記事(‘In booming India, spirituality goes commercial’)によれば、Yogiraj Gurunath Siddhanath というグルが、自身の説教を録音した CD の適正価格をいかにして定めるか、またいかにして海賊盤などから録音内容を守るかということ、長時間に渡って弟子たちに説いているという。この現象の背景には、経済自由化以降のインド社会の変容とそれに伴う宗教文化の商品化(commoditisation)があることは明らかである。さらにこの記事では、インドの経済自由化における指導的役割を担う人々が、「スピリチュアリティ」に傾倒していつていることを報じている。スピリチュアリティなるものの追求は、人々の苦悩や不安から解放されたいという願望によって発動されている。しかし、大規模化した都市の宗教施設は、そのスペクタクル性ゆえに、こうした個別的苦悩や不安を必ずしも十分に受容し、緩和させうるものではない。新興カルトに対する人々の根強い支持は、人々の宗教経験の皮相化に関係がある。現代インド社会の宗教実践は、三尾の言を借りれば、「インドの宗教文化は一層の大衆化・見せ物化の進展と、個別で直接的な信仰経験の追求という二つの極を揺れ動きながら変容を続けつつある」[三尾 2003:58]。

以下では、近年増加傾向にある都市居住者による治癒儀礼のための訪村行為に注目する。彼らを村落へと向かわせている要因は、単に交通手段の発達による「時間と空間の圧縮」[ハーヴェイ 1999]のみにあるのではなく、都市の大規模寺院では回収できない人々の個別的な苦悩や不安と、その受け皿への希求がその原動力となっている。

ウツタル・プラデーシュ州東部の都市ワラーナシーより北東へ 15km、ワラーナシー・カントンメント駅より乗合リキシャーやバスを乗り継ぎ一時間ほど行ったところに B 村はある。この村に、アゴール・バーバーと呼ばれるオジャー(呪医)が住んでいる。彼はゴーサーイン・カーストに属する 60 歳代の男性である。彼は 20 年ほど前までは政府系銀行の使用人をしてしたが、その後、アゴール系聖

研究成果の概要 つづき

者の下に入信・修行し、15年ほど前からB村の大きなピーパルの樹の下にアーシュラム(道場・聖所)を構えている。当初、アゴール・バーバーを慕うのは、一族を含む一部の帰依者のみであったが、今では有名なオジャーとなり、多くの信者やクライアントが治病や除災のために彼のもとを訪れるようになっている。

クライアントはとくに、厄払いに最適な日とされる日曜日と火曜日の朝にアゴール・バーバーのもとを訪れる。ここで注視したいのが、B村内の人間が治病や邪術・悪霊おとしのためにアゴール・バーバーのもとを訪れるのは稀で、クライアントの多くがB村落外、とくにヴァーラーナシーやアラハバードの都市居住者であるという事実である。以前は銀行の一使用人に過ぎなかったアゴール・バーバーであるが、B村内にアーシュラムを築いてからは、この村で一・二を争うほどに急速に財を成した。そのため、パンディット(ブラーマン・カースト)やタークル(クシャトリア・ヴァルナ)などのかつての「支配層カースト」を中心に彼を妬む者も多い。さらに、北インドでは一般に、邪術おとしを行うオジャーは、同時にトナーを仕掛ける際の技術とマントラについての知識も有しているという認識がかなりの程度共有されてため、B村民の彼への評判は頗る悪い。こうした理由もあって、アゴール・バーバーのもとへ治病のために訪れるB村の住民は極一部の者に限定されている。

一方、B村内の噂や人間関係のコンテクストから比較的自由的な村落外の都市居住者たちは、オートバイクや自家用車を利用して、熱心にアゴール・バーバーのもとを訪れている。B村民の話では、このように度々都市部の人間がB村までくるようになったのは、ここ数年のことであるという。都市部から来訪するクライアントの多くは邪術や悪霊おとしのためにアゴール・バーバーを訪れている。ただし、アゴール・バーバーのもとに来訪する都市居住者が、恒常的かつ積極的にオカルトの存在を肯定しているわけではない。むしろ彼らは一般に、自分たちが高等教育を受け、都市生活をしていることを誇りにもしているため、邪術や悪霊などは村落部(「田舎」)に住む者たちだけの関心事であると考えている。しかし実際には、こうした認識が彼らを村へと向かわせている。というのも、彼らは、ひとたび邪術や悪霊に苛まれることがあれば、それをおとすには都市にある寺院ではなく、日頃から邪術・悪霊おとしに携わっている村落部の呪医による治療が効果的であるという認識も同時に有しているからである。つまり、都市居住者による邪術・悪霊おとしのための訪村行為には、彼ら自身の村落に対するイメージが影響を与えていると考えられる。

都市と村落社会とはヒト、モノ、カネ、情報などの移動を通じて密接に結びついており、その境界は明確に線引きできるようなものではない。しかしその一方で、人々の間では「都市と村落」に対するある種のイメージや場所感覚が保持されているということも事実である。ここで言う場所感覚とは、調査対象地の人々の身体性に根ざした、自身の生活の場としての「こちら」とわからなさが付随する場としての「あちら」というような、主観的空間編成と同義である。主観的空間編成は、行政的・地理的な空間区分、あるいは土地や建築物などの物質的な諸要素から影響を受けながらも、むしろ、個々人の生活世界での社会的行為や関係性を通じて不断に産出され続ける想像力によって成立している。その意味で、主観的空間編成においてその中心となるのは常にその想像力の主体である。都市居住者の「邪術や悪霊などは村落部の人間の関心事である」という言説は、その主体の生活の場である「ホーム」としての都市と、主体の生活の場から離れた、ある種のわからなさ(オジェ[2002]の言う「他性」)が伴う「アウェイ」としての村落社会という主観的空間編成を基に生み出された、彼ら自身の想像力の発露といえるだろう。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①小松原秀信「インド社会の邪視について」、『コッラニ』(東海大学『コッラニ』編集部)、18号(特集:南アジアの民間信仰)、2006年、pp.64-75。

④小松原秀信「インド社会の邪視の諸相
—ウツタル・プラデーシュ州東部のある村落での事例より」、
日本文化人類学会第40回研究大会、於:東京大学、2006年6月。